



大原アトラス 4 皮膚外科手術アトラス

■大原國章・著

評者 臼田俊和
前・名古屋大学臨床教授

本書を読み始める際には何はともあれ、まず「序」を読むべきである。著者の皮膚外科に関する哲学とでもいうべき理念が、序文で簡潔に述べられているので、皮膚外科を志す若い皮膚科医には、最初に眼を通しておくことを是非とも勧めておきたい。

著者の大原國章氏は、半世紀近くに亘って皮膚外科に携わって来られたのであるが、今までに経験された手術症例を集大成する一環として本書は編纂されたものであり、「大原アトラスシリーズ」の第4弾となる最新書である。今から40年程前の本邦においては、皮膚外科学という概念はおろか、外科的アプローチを必要とする皮膚疾患を体系的に取扱うことの重要性について、未だ十分に認識されてはいなかった。そのような黎明期ともいうべき時代から、皮膚外科におけるパイオニア的存在として活躍されてきた著者が、次世代の皮膚外科医のために、渾身の力を込めて送り出した一冊といっても過言ではないであろう。ややもすると、皮膚外科と形成外科は、しばしば混同されがちなのではないだろうか。筆者は以前から、両者は似て非なるものであるように感じていたが、本書を読んで改めてその感を強くしている。

さて、本書を開いてみると、疾患の多彩さ、症例の豊富さ、手術の多様さに、読者は圧倒されてしまう。内容は手術手技と部位別、疾患別によって第1章から第18章までに分けられており、「できるだけ多くの方法、選択肢を紹介す

る」というコンセプトが示すように、手技では摘出術からレーザーまで含めた広範囲なものとなっている。部位別としては、顔面の部分別は言うまでもなく、頭のとっぺんから足の裏に至るまで、症例が余すところなく網羅されている。すべてカラー写真で構成され、総頁数は400頁程である。術前写真、作図、術中・術後写真、術後の経過がコンパクトに配置されており、簡明な説明文も加えられているので、一目瞭然に理解可能である。手術手技は冗舌な文章や図解のみでは、具体的なスキルを読者に伝えるのは至難の業ともいえるが、本書を見ていると「百聞は一見にしかず」を実感できる。皮膚外科のビギナーからエキスパートまでは勿論のこと、一般の皮膚科医さらには皮膚科以外の診療科医であっても、皮膚腫瘍や母斑、血管腫などを、「どのように治すことができるのか」を視覚的に知ることが可能なので、円滑な医療連携を推進する際の一助にもなるように思う。

繰り返しになるが、「選択基準について絶対的な正解は存在せず、あくまで相対的な解答」という著者の言葉は、皮膚外科学のみならず皮膚科学のあるべき姿を示唆しているようにも思えるので、常に身近に置いておく書の一冊として、ぜひ加えておくべきであろう。

B5判・400頁・定価18,360円(本体17,000円)
学研メディカル秀潤社・2017年6月27日発行